

# 生存科学研究ニュース

VOL.19. No. 3 2004.10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

Eメール [seizon@mx1.alpha-web.ne.jp](mailto:seizon@mx1.alpha-web.ne.jp)

## 第2回「脳・心と教育」研究会



表記研究会は(財)生存科学研究所主催、(株)日立デザイン本部、(株)日立基礎研究所共催により2004年9月2日(木)3:00より(株)日立デザイン本部において開催された。今回は金沢工業大学場の研究所所長清水博氏を招いて「場と身体と脳」というテーマで行われた。

まず、研究責任者の小泉氏より最近の研究から分かった胎児の活動と脳の発達に関する示唆に富む研究結果が報告された。清水氏は場について、卵モデルを用い、卵を2つお皿の上で割ると黄身の部分(私:局在的自己)はそれぞれ独立しているが自身(場:偏在的自己)は交じり合うことを例に場の共有を説明、場は生の存在のあり方そのものであり、生きものを即興劇をする役者集団に例え、その即興劇を場の外に立って客観的に見る外的観点(科学の立場)と現場に関わりあう役者の一人としてみる内的観点があるが、場の理論とは内的観点

から舞台上の役者の働きを見てゆくことと説明、場の共有の具体例として早稲田大学三輪敬之教授らが行った互いに離れた場所にいながら通信機器により場を共有した場合の各人の行動に関する実験結果について報告、解説がなされた。

その後討論が行われ、インターネット上で場はできるか、場の共生としてのローカル線と新幹線など活発な討論が行われた。

## 第8回「代替医療と国民医療費」研究会

2004年7月15日(水)午後6時より、四国がんセンター・臨床研究部長の兵頭一之介氏を招いて表記セミナー「がん患者の代替医療使用」が開かれた。

代替医療とは、「現代西洋医学領域において、科学的に未検証および臨床未応用の医学・医療体系」を総称することばである。代替医療の使用率は先進国で低く、開発途上国では高くなる傾向を示す。

インターネットの普及や予防医学への関心、患者の治療選択における自己決定意識の高まりなどから、代替医療の利用者は近年急速に増加している。その中でもがん患者は特に利用率が高い。厚生労働省がん研究助成金による「わが国におけるがんの代替療法に関する



る研究」班(主任研究者：兵頭一之介)は2001-2年に、全国のがんセンター患者とホスピス患者あわせて3,098人を対象にアンケート調査を行った。それによると、がん以外の患者の利用率が26%にとどまるのに対し、がん患者の利用率は45%にのぼった。緩和医療を最優先とするホスピス・緩和ケアでは医師は代替医療に寛容な姿勢を示すことが多く、約60%の患者が代替医療を利用していた。

代替医療を利用している患者のうち9割は、アガリクスやプロポリスなどの健康食品をとっていた。きっかけは「家族や友人のすすめ」が75%以上で、「自分で調べた」患者は4分の1以下だった。また代替医療を利用していることを医療従事者に「知らせなかった」「聞かれなかった」患者はいずれも6割を超え、医療従事者が十分に実態を把握できていないことが示された。

代替医療に使う金額は月額平均5.7万円、年間68万円だった。2001年の厚生労働省がん研究助成金による「がん生存者の社会的適応に関する研究」(主任研究者：山口建)によれば、日本のがん生存者数(cancer survivor)は推定300万人で、そのうちの45%にあたる135万人が年間68万円使うとすると、総額では920億円、約1,000億円が代替医療に消費されていることになる。

無視できない金額が代替医療に投じられているにもかかわらず、医療従事者は代替医療を醒めた目で見ている。代替医療がエビデンスに乏しいことや、もともと臨床医が多忙であることが原因だが、誰でも買えることや代替医療にも有害作用の可能性があること、効果や安全性を検証する必要性が高まっていることなどを考え合わせれば、代替医療に関する正しい情報を医療従事者が身につけていくことは不可欠だといえる。

患者・医療従事者双方に適切な情報を提供するために、ガイドラインの作成やウェブサイトの構築が進んでいる

(<http://www.mskcc.org/mskcc/html/11570.cfm>)。

真の医療とは、「よく計画された臨床試験から得られるエビデンスに基づく医療」に他ならない。不確かなものを「代替」の

名の下に漫然と放置すべきではない。有効性と安全性を一つ一つ明らかにしていくべきである。

以上の講演を受け、「健康本の不確かさ」「医療従事者の認識」などのテーマについて質疑・討論がなされた。全体を通して、医療従事者と患者の意思疎通不足を問題視する意見が多く出された。活発な質疑討論もあり、時間を大幅に超過して会は幕を閉じた。(津谷喜一郎・五十嵐中)

#### 老年期における安全保障研究会

2004年7月27日(木)午後6時より、順天堂大学医学部公衆衛生学教室の田城孝雄氏を招き「在宅医療の現場から」と題して研究会が開かれた。

2000年より実施された介護保険について、実際に在宅医療と取り組んでいる氏が現状および問題点を報告した。

まず、在宅ターミナル・ケアという視点から①在宅ターミナル・ケアでは結果よりも本人や家族が「満足」したかどうかが重要な評価のポイントの1つになるので、コミュニケーションスキルが重要なこと②在宅ターミナル・ケアは介護なしに成立しないが医師、看護師、ヘルパーという病院医療での枠組みをそのまま使い続けていることで、さまざまなストレスやジレンマを生んでいる。解決策として①自宅医療での看護師の権限拡大(居宅療養管理指導士の創設)②往診医、訪問看護師、ヘルパー、患者が情報共有できる「カルテ」作り等が考えられていること等報告された。

つぎに日本におけるケア・マネジメントの先駆的役割を果たしてきた在宅介護支援センターについて、この制度は看護師・保健士の保健医療職と、社会福祉士・介護福祉士の福祉職の両職種が配置され、生活上の支援を望む高齢者に対して、総合的な対応などを行って来たが、介護保険の導入により居宅介護支援事業者との役割分担が不明確になっており、再検討が必要であることが報告された。

武見太郎生誕 100 年記念シンポジウム

## 人類は 21 世紀をどう生きるべきか

——環境と資源を中心として——

日時：2004年11月6日（土曜日）

午後2時—午後5時

会場：順天堂大学医学部 10 号館 1 階

カンファレンス・ルーム

### <プログラム>

14:00—14:20

#### 基調講演

人類生存の持続性と価値観の転換：江見康一 生存科学研究所理事長  
シンポジウム

14:20—14:40

武見太郎氏と健康構想（仮題）：田中慶司 厚生労働省健康局長

14:40—15:00

21世紀の地球環境（仮題）：柳沢幸雄 東京大学大学院教授

15:00—15:20

人類の進化と未来：佐倉統 東京大学大学院助教授

15:20—15:40

脳・心と教育（仮題）：小泉英明 (株)日立製作所フェロー

15:40—16:00

リスク・コミュニケーションとはなにか：吉川肇子 慶応大学商学部助教授

16:00—16:10

#### <休憩>

16:10—16:55

#### 討 論：

司会・進行：丸井英二 順天堂大学医学部教授

16:55—17:00

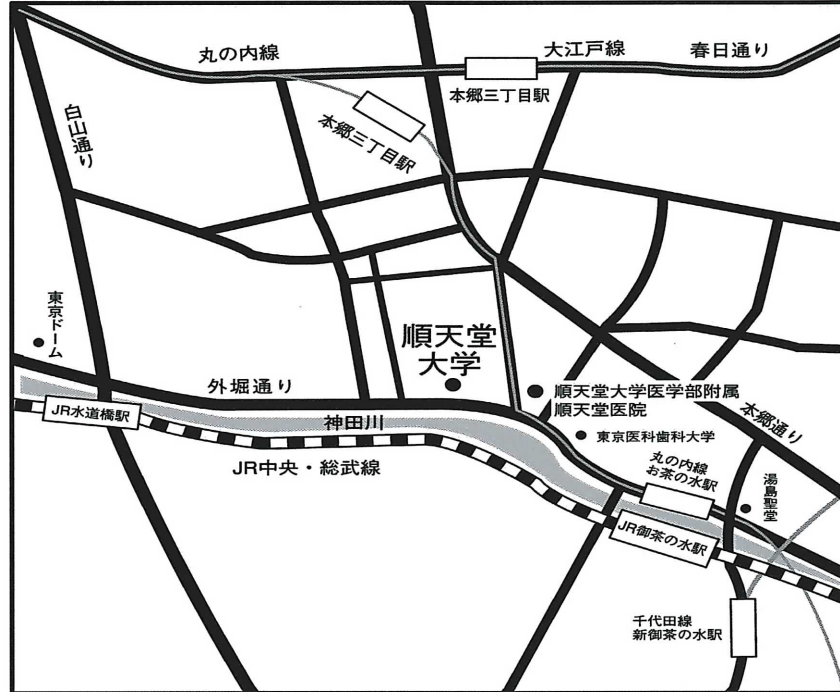
開会の辞：大塚 正徳 財団法人 生存科学研究所副理事長

なお、シンポジウム終了後、懇親会が同じ建物の中にある 3 番教室でございます。  
奮ってご参加ください。



# 武見太郎生誕 100 年記念シンポジウム会場案内

順天堂大学医学部 10 号館 1 階 カンファレンス・ルーム



- |       |                    |
|-------|--------------------|
| JR中央線 | 御茶ノ水駅から6分、水道橋駅から6分 |
| 地下鉄   | 丸の内線 お茶ノ水駅から5分     |
|       | 千代田線 新御茶ノ水駅から8分    |
|       | 大江戸線 本郷三丁目駅から10分   |

